

第1回 京都市西陣を中心とした地域活性化ビジョン検討委員会

《日時》

平成29年12月23日（土）午後5時～午後7時

《場所》

上京区役所 4階 会議室

《出席者》

別紙一覧表参照

《議事録》

1 開会

— 省略 —

2 京都市長あいさつ

◆門川京都市長

「西陣」と呼ばれて550年の年に、この会を発足できたことを嬉しく思う。また、各界で御活躍の錚々たる方々に委員に御就任をお願いし、快くお引き受けいただいたと共に、市民公募の委員もしっかりとした理念の下に応募していただき、心強く思う。感謝申し上げる。

かつてこの辺りは日本の政治、文化、経済の中心だった。王朝文化が花開いた平安時代は内裏等を中心に日本の政治が行われ、さらに、室町時代は「花の御所」を中心に政治が行われた。豊臣秀吉は聚楽第をこの地につくった。政治も経済も文化もあらゆる中心としてこの地は栄え続け、そして応仁の乱から550年、西陣と言え「西陣織」と言われるが西陣織自体の歴史は千年を超える。今もその伝統を守り、また、寺や神社、上七軒、そして町家があり、地域力、また文化力、それを牽引していただける市民の皆様、地域の皆様の人間力があふれている。

しかし、現在の西陣織は昭和40年代の1/10以下となり、2万人を超えていた職人も1,000人台になっているという厳しい現実もある。また、素晴らしい町家がガレージやマンションになっていく状況となった。それについては市会で議論の上、町家の保全継承についての条例を作っていた。京都市が保全すべき町家や地域を指定し、どうしても解体しなければならない時は、1年前に届け出をしていただく。それができなければ罰則規定を作る。あるいは、それを知らずに解体された場合は解体業者にペナルティを課すという、全国に例のない厳しい条例である。同時に、京都市も宿泊税等で財源を確保しながら町家の保全に本気で取り組み、さらに、国に対して保全制度、例えば相続税の猶予等をしっかりと要望していかなければならない。そういう課題もある。

私は思うのだが、西陣の地域一帯が寂れてしまうと、あるいは、寂れなくても異質なものを、単なる住宅街になったら、京都は京都でなくなってしまう。この地域に伝わる人々の暮らし、生き方の哲学、さらに風情、町並み、そうしたものの集合体が京都の魅力であると感じている。

したがって、何としてもこの地域を活性化していきたいと考えており、そのために皆さんの英知を集めていただきたい。

実は、着物についても、若い人の着物への関心が高くなっている。京都大学で環境問題に取り組まれている内藤先生や浅利先生等が、箆笥に眠っている着物の寄付を呼び掛けられ、本日、京都大学で着物を復活させる企画が開催された。私も参加したが、若い人、また留学生も含めて着物を着て喜んでおられた。そういう取組が始まっているので、西陣のことを述べて「今、西陣の着物を買っておけば文化財になる」と、本当に文化財になっては困るが、そういう話もしたところである。本当に英知を集めて取り組んでいきたいと思う。

このような上京区に文化庁の全面的な移転も決まった。そして、我々は新しい京都遺産制度をつくることにした。京都には、本当は世界遺産になってもおかしくないものが数多くあるが、世界遺産は1年に1つしか国が申請できない上に、国に相談しても「京都はもういいだろう」と言われる。そういう中で、世界遺産制度でなかなか認定されないということで、国では日本遺産制度を作られたので、上七軒を含めた五花街を申請したが、国は、地方創生ということで、まだ観光客が来ないようなところの文化財を認定するという姿勢である。それも分かるが、日本遺産制度の価値を高めようと思うなら、京都を外してはならないはずである。そこで、そう主張しつつ、京都は京都で「京都遺産制度」をつくることにしたものである。

この素晴らしい文化力、地域力、歴史力、それを支えてこられた人々の人間力、それらを活かしきってこの地域が活性化し、それを京都全体、日本全体の活性化に結び付けていきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

3 委員紹介

— 省略 —

4 委員長選出

— 省略 — (高田委員が委員長に就任)

5 京都市長からの諮問

【 諮問内容 (抜粋) 】

西陣を中心とした地域活性化ビジョン(仮称)の策定に関する次の事項について、貴委員会の御意見を賜りたく諮問いたします。

< 諮問事項 >

西陣を中心とした地域について

- (1) 当該地域の将来像
- (2) 将来像を実現するために必要な施策
- (3) その他必要事項

6 委員長あいさつ

◆高田委員長

この委員会には、西陣を中心とした地域の活性化という非常に難しい課題について議論することが求められている。一方、この地域は京都の縮図であるとも言え、地域内の問題は京都全体の問題でもある。いずれにせよ複雑系問題を解かなければならない委員会だと認識している。

私自身は、現在、京都美術工芸大学で主として建築に関する研究教育に携わっている。この3月までは京都大学の建築学科におり、住まいやまちづくりの研究、たとえば、京町家や細街路、堀川団地の再生も含めた既存の住宅やまちの再生、地域のまちづくり等をテーマとした研究を行ってきた。

京都大学時代から、上京区を含めた京都の歴史的市街地の多様な問題について考えてきた。今回の検討対象は西陣を中心としたファジーな地域設定のようだが、その活性化の議論は京都全体にとって大変重要な議論をすることになると思う。長い歴史や文化の蓄積がある場所であると同時に、伝統産業や地域経済という点では多くの問題を抱えており、居住という視点で考えると高齢化と人口の減少が進んでいるところもある。

町家や細街路については、京都の中でも特に集積している地域であるが、現在、それらは再評価される動きがあり、そのような動きと、そこに内在する様々な問題を同時に考えながら、ポジティブな方向を探る努力が必要である。生活文化の継承についても危機的な状況だという議論があるが、一方でこういうものをきちんと再評価して、次の世代につないでいこうという動きも少しずつではあるが出てきている。

産業の面では、今回の委員の中にも新しいビジネスにチャレンジしている方がおられるが、そういう動きを上手く結び付けて、資源を活かして、誇りの持てる京都、誇りの持てる西陣を次の世代に継承していくことを考えていきたいと思っている。

子どもの生育環境としての京都をもっときちんと捉えなければならない。多くの観光客が来訪し、また、細街路や町家等が次々となくなっていく状況の中で、子育て環境は極めて厳しい状況にあり、そのことが少子化にさらに拍車をかけている。また、高齢化も進んでいる中で、高齢者の交流の場もなくなっている。とはいえ、観光と暮らしを対立的に考えるのではなく、調和的な関係を見出そうという取組もいくつもある。そもそもまちづくりの本質はそこにあり、必ずしも1+1=2にはならない。いろいろな解があるので、それをできるだけポジティブな方向に導く議論を進めたいと思う。

文化庁が上京区に移転することとなったが、これも1つの刺激であり、またこの時期に活性化を検討するのも、国全体に対して何らかのインパクトを与えることにつながるだろうと思う。いずれにしても非常に難しい問題を扱うことになるが、行き先を早急に決めるよりも、多様な可能性を探りながら議論をしていただければと思う。

委員の皆様については、多様な分野で、しかも高い専門性を持った方々に集まっていたと思う。多面的な視点、多様な価値観からこの問題を議論して、できるだけ横断的な議論ができるようにしていければと思っている。いずれにしても、大変難しい問題を限られた時間で議論しなければならないので、皆様方の御支援、御協力をお願いしたい。同時に、ここに集まっている委員だけではこの問題を捉え切れない面もあると思うので、この委員会と並行して、

地域の方々、様々な活動をされているの方々からの意見を求め、この委員会に情報を還元し議論するという運営をしてはどうかと思っている。それも含めて、是非とも活発な御議論とポジティブな方向でのビジョンづくりをお願いしたい。

7 議 題

◆高田委員長

議題に入る前に、委員会規則の第2条第4項で「委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代理する」となっているので、僭越ながら、私の方から委員長の職務代理を指名させていただく。新川委員をお願いしたいと思うが、いかがか。(一同賛同の拍手)

皆様の御賛同もいただいたので、よろしくをお願いしたい。

それでは議題に移りたい。時間が限られているので、まず「(1)ビジョンの背景と対象地域」「(2)西陣を中心とした地域のポテンシャルと課題」「(3)将来像と活性化の方向性」の3つの議題についてまとめて事務局より資料の説明をしていただき、その後、委員の皆様から御意見をいただきたいと思う。

(1) ビジョンの背景と対象地域

(2) 西陣を中心とした地域のポテンシャルと課題

(3) 将来像と活性化の方向性

【資料説明】 — 省略 —

◆高田委員長

資料3, 4, 5について説明があったが、特に資料4は参考資料集がデータソースであり、この委員会のために事前に、住民アンケート、事業者アンケート、観光客アンケート、あるいはヒアリング等の多くの調査のエッセンスをまとめていただいた。これも含めて後ほど議論に活用していただきたい。

本日は第1回なので、自己紹介的なことも含めて、この活性化ビジョンの検討に関連する皆様の御意見を幅広く伺えればと思う。それでは、赤星委員から順にお願いしたい。

◆赤星委員

私は京都文化交流コンベンションビューローと京都市観光協会を兼職しており、観光客の誘致を行っている。主に、インバウンドと呼ばれる海外の観光客に、いかに京都に来ていただくか、そして京都の中でしっかりとお金を使っていただき、さらに満足していただいて、リピーターになっていただく、あるいは他の方に勧めていただくことが私の主な業務である。

現在、京都観光は絶好調だが、私は、6年前の震災の後にコンベンションビューローと観光協会の組織再編が行われた際、東京から声をかけていただいて今に至るという、京都に関する知識や京都のローカルルールも分からない余所者である。そういう人間が6年間京都にいな

ら業務を進めている中で、観光客が増え過ぎてバスが混雑する、違法民泊が増え過ぎて地域のコミュニティが崩れる等の諸問題が発生してきたので、これからは単に観光客に来ていただく、単に交流人口を増やすという取組から、観光客が様々な魅力のある地域に分散していただくためにどのような情報発信をするべきか、あるいは我々が観光資源と考えていなかったものの中から海外の観光客にとっては新たな魅力となるものを地域の皆様と一緒に発見し、観光客の満足度をいかに上げていくかということを考えている。

今回、西陣を中心とした地域の活性化の方向性について、皆様と共に議論をさせていただければと思っている。活性化というのは、言葉で言うのは簡単で、人が来れば活性化したように思われるし、イベントや祭りをすれば盛り上がる感じはあるが、一番大事なことは様々な議論を行い、最終的には地域の皆様に自分ごとと捉えていただいて、例えば観光客というパーツを使ってどのようにコラボレーションして活性化していくのか、あるいは、いかに持続的な取組、定住人口を増やす取組をしていくのか、そのようなことを議論させていただければと思っている。この地域は京都の縮図だと思うので、よろしくお願ひしたい。

◆伊豆蔵委員

私自身は明治 30 年頃から続く西陣織を製造・販売している織屋の 4 代目で、業界に入って 40 年ほど経つが、当時、この上京区役所の周りは出機が多く、私の店の機を織っていただいている方も何十人もいた。そこを周りながら材料を届けたり、商品を受け取ったりしていたが、段々と京都市内の織手も高齢化して、今は丹後地区で製織しているという状況である。

着物産業は一時期 2 兆円産業と言われていたが、今は 2,800 億円まで落ち込んでいる。また、我々が出荷している金額と消費者が買われる金額の掛け率も、私がこの業界に入った当初は 3 倍くらいで、10 万円で出荷したものが 30 万円くらいで消費者の手元に渡っていたが、今は 6 ～10 倍になっており、業界内の富の分配が小売店主体になって、メーカーに配分される率が少なくなっている。その分、職人に対して十分な対価が与えられないという現象が起きてしまい、今は若い職人が入って来ることはほとんどない。どちらかと言えば、年金をもらいながらアルバイト的に行っているような状況で、丹後地区においても平均年齢が 70 歳を超える職人たちに我々は支えられているという状況である。

西陣と言えば「西陣織」が真っ先に挙げられるが、西陣で西陣織を織っているところが少なくなっているというのが現状であり、関連産業の方々も減っているのも、将来については、どうすれば西陣織を続けていけるかということのを常に自問自答している。

今まで我々は消費者に西陣織を提供する中で、作業の多くを小売店や問屋に頼ってきた面があり、自らが発信する力がなかった。例えば、外国人が京都に来られて「西陣織を見たい」と言われても、西陣織会館の織物を見ていただいて、デモンストレーションで機を織っているところを見ていただくくらいしかない。これからはそういう方々に西陣織を販売するチャンネルを我々の力で持たなければ、この西陣の場所から段々と西陣織が見られなくなってしまうのではないかと考えている。

今回私がどれほどお役に立てるかは分からないし、私にはこの業界の知識くらいしかないが、何かお役に立てればと考えているので、1 年間よろしくお願ひしたい。

◆神原委員

北野天満宮では既に10年程前から氏子地域とのつながりを大切に行事等に取り組んでいる。

当宮に私が奉職して30年になるが、年々氏子意識が薄れてきたように感じており、何とか神社と氏子地域の若い方々との結び付きを強くできないかと考えて思いついたのが北野天神太鼓の復活である。日本の伝統文化である和太鼓を通じて地域と手を取り合い、発表の場をつくり、地域を盛り上げていくことができないかと考えたわけである。北野天神太鼓を結成して今年が10年目となるが、太鼓のメンバーは当初の20人から会員を入れると100人となった。また、地域の仁和小学校、翔鸞小学校の児童にも太鼓を伝えている。地域と一体となり、「神職も地域の人も同じ位置に立って手を取り合い盛り上げていこう」と、この取組を10年間育ててきた。

また、この10年を機に新しい風も吹いている。平安時代に始まったとされる「北野祭」、応仁の乱などをきっかけに途絶えたお祭りを復活しようという声が上がったのである。地域の若者が旗を振って100人が集まり、あと10年足らずのうちに神輿や行列を復活させようという気運が高まっている。当宮は当然西陣とのつながりが強い。西陣と呼ばれる前から、この地域では大舎人の織手が金工や染織・工芸等に携わっており、当宮では室町時代から、3年経ったら神輿を壊して新しく作り上げる「三年一生会」を繰り返してきた。その3年の周期により「次はこういうものをつくりたい」とか「こういう工夫をしたい」という思いが生まれ、それが織物の技術向上につながって、今日の西陣織の基盤を築いた。したがって、北野と西陣は切っても切れない関係にある。この様な西陣織と関わりのある神輿の復興に向け、若手の集団200名が一致団結してこの地域を盛り上げていこうと考えている。

その他に、京の七夕に関しても「地域と共に」である。三年が経過した現在では当宮と上七軒歌舞会・上七軒匠会・今出川通の菅公会・北野商店街・大將軍商店街等と年々広がり、商店街の方からは色々と励ましの言葉をいただいている、

地域を盛り上げるために少しでもお役に立てれば。1年間よろしくお願ひしたい。

◆上林委員

資料4に「新たなものづくり」という項目があり、課題として「事業者間(同業種・異業種)のつながりが弱い」と書かれているが、私もそのことに触れたいと思う。

西陣にはたくさんの友人がいるが、今回お話しするのは、子供の頃からの友人ではなく、自分たちの子どもが上京中学校に入った時にPTAの本部役員をした仲間2人で、西陣織に携わる方である。この2人はデザイナーを迎えて京都市バスのシートカバーを新しく作ったが、同じ業種ではなく、金欄と帯という違うものを作られている者同士がPTAでつながり、それがものづくりでもつながったという例である。成功するかどうかはこれからだが、地域には意欲を持った方がおられるので、そのパートナーシップを応援することで、いくつものグループ、活動が生まれることは西陣にとっても大切ではないかと思う。

また、私は社会福祉協議会の会長を務めているが、その視点からの課題は後で話をさせていただくとして、もう1つ私が長く勉強している京都の路地について話をしたい。

明治維新によって京都は中央都市から地方都市に転落することになったが、中央政府から来

る京都府知事は優秀な方が連続した。この人たちのお蔭と町衆の力によって学校をつくり、殖産振興に成功するわけだが、そういう成功の中で他所から多くの人が京都に入って来た。そして、そういう労働者の居住を保障したのが路地型の借家であり、それが上京にはたくさんある。これは産業を支えるために暮らしを保障したものだが、京都には上京、中京、下京、東山、旧市街を足すと 2,900 ほどの団地、路地があり、そのうちの 853 団地が上京区にある。これを何とかしなければならぬが、なかなか都市住宅として位置づけることができていない。是非とももう一度位置づけ直して、特に 2.7m 以上の接道幅を持っている団地が 140 もあるので、この 140 の団地については京都府、市の力を借りて、あるいは居住者の力も借りて、改善できるような仕掛けをしたいと思っている。参考として、ロンドンのミュージズが綺麗に生まれ変わった例がある。改善するためのガイドラインを作る等、ウェストminsterシティが積極的に取り組んでいる。

このように歴史の中で生まれた市街地景観、市街地の形があるので、できる限り京都市の力もお借りしながら再生できると良いと思っている。よろしくお願ひしたい。

◆タナカ委員

私は堀川中立売にある「京都リサーチパーク町家スタジオ」という、町家を活用したシェアオフィスとレンタルスペースの運営を 7 年前から担当し、この地域に関わることになった。

現在、株式会社ツナグムを起業し、その町家の運営を継続しつつ、仲間と共に京都に移住する人たちをサポートする「京都移住計画」も展開している。「京都」をネットで検索するとやはり観光のサイトが多いが、我々は仕事や住まい等、暮らしの情報を発信し、それを通していろいろな方が京都に移住してくると良いと考えている。

そして、3 年前からは上京の人や拠点、事業者等をつなぐ「上京オープンウィーク」という企画もスタートさせた。初回は上京で活動や事業展開をしている方々によるプレゼンイベントを開催し、上京にはいろいろな方がおられることがわかった。その後、課題もあるが、それがポテンシャルであり、すべて可能性だと思っているので、その中で私ができることをボランティアベース、あるいは事業ベースで取り組んできている。検討委員会では、私自身が取り組んでいることや、これからやりたいこと等についてコメントできればと思っている。

ちなみに、西陣については、西陣＝西陣織というイメージが強いと思うが、私の中では「ものづくりのまち」や「クリエイティブなまち」のイメージであり、まちのテーマを決めながらそこに向かって行く取組ができれば良いと思っている。「若者×西陣」「クリエイティブ×西陣」というテーマで新しい事業が起こる構造等をつくっていききたいし、そういう機会づくりが必要だと感じている。

あと「京都リサーチパーク町家スタジオ」では起業家のコミュニティづくりや起業支援も行っており、これまで IT や Web 等の起業が多かったが、最近はそれも少なくなってきたと感じている。次の可能性として、今ある西陣織の事業者や上京、西陣の事業者と新しい若者のアイデアが融合するような機会づくりをしていきたい。これから日本全国で事業承継や跡継ぎがキーワードになると思うので、若い人たちやクリエイティブな人材の取組を上京の中から実現できると、西陣が新しいブランドとして新しいまちの魅力となると感じる。

最後に、上京オープンウィークから上京クリエイティブネットワークという組織も立ち上がった。「上京クリエイティブビレッジ（仮）」と称したウェブサイトを作って情報発信しようと考えており、サイトを通してクリエイティブな人材の移住や新しい産業が生まれるようなサイクルをつくってあげたいと思っている。この場で皆様と議論しつつ、コンテンツづくりも考えたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

◆鳴橋委員

公募委員として選んでいただいたので、よろしくお願ひしたい。

私自身の出自を紹介すると、130年ほど前に元上京区であった新洞学区から桃菌学区に来て、その後は西陣学区や出水学区等、上京区を転々としながら、今は仁和学区にいる。私自身も小学校から中学校、高校、大学を経て、職場もすべて京都の中で暮らしてきた。この半世紀、ずっと京都にいたわけであり、母から歴史の話を聞く中で、京都の歴史に興味を持つようになった。

本業は京くみひもで、「鳴橋庵」という店を拠点に「くみひも体験」や「抹茶体験」を提供し、それに合わせて京都の話をしている。タナカ委員の「京都移住計画」でも話をさせていただいた。

もう1つ、上京区役所が運営している「上京ふれあいネット『カミング』」のサイトで取材コーディネーターをしており、天神太鼓や「De まち」の取材もした。またいつか「弘道館」にも伺いたいと思っている。

このように上京区内の様々な場所に伺う機会が多いが、それに伴いいろいろな問題を耳にすることも多い。資料5にポテンシャルと課題が書かれているが、まさに全部見てきたと思う。興味があるのは「③生活に根付いた文化」「③歴史や伝統文化の集積」等だが、上京区役所のまちづくり活動支援事業をいただいて「京都上京 KOTO-継(ことつぐ)の会」を立ち上げ、上京区内の生活文化を次の世代に受け継いでもらえるお手伝いをしている。

また、「カミング」の取材の中から発生したイベントとしては、人間国宝の故曾和博朗(そわひろし)氏の取材をした折に、今宮神社の御旅所に能舞台があることを知り、そこをお借りして地域の方々や学生たちの発表の場とし、昔あったコミュニティをもう一度復活させたいという思いから「能舞台フェスタ in 今宮御旅所」というイベントを4年前から開催している。これには上京区文化振興会の共催もいただいております、大変感謝している。

もう1つ関心があるのが防災である。私の生まれたところは抜け路地だが、もし大地震が起きた時に両方の家が倒れて道を塞いでしまったら、どこから逃げたら良いのかという危機感を感じている。そういう場所がたくさんあるので、大地震が迫っていると聞くにつれ、これは緊急の問題だと思っている。最悪の状況を想定して、もし京都が全部潰れてしまったら何が残るのかと考えているが、その点においても生活に根付いた文化や歴史、伝統文化が京都の本当の魅力であるとは私思っており、昔、応仁の乱ですべてが燃え、その後も京都は何度も大火に見舞われながら、その度に人の力で復興してきたので、この文化を消してはいけないと強く思っている。

◆新川委員

地域活性化と言ってもなかなかイメージが湧き難いので、将来どのような姿になるのかということを考えてみたが、これといった姿が出て来ない。つまりは考え難いということである。

ただ、これまでお話しされた方々と共通しているのは、京都が少なくともこの 1000 年、あるいは西陣と言われて 550 年やってこられたのは、この間ずっと同じことをしてきたわけではないということであり、それだけは間違いない。要するに、常に変わりつつ、そして様々な刺激を受けつつ、自分たち自身も変化しながらここまで来たというところがあるはずであり、それがなければここまでたない。それは事業者も企業もこの地域で暮らす我々も同じで、「十年一日」と言っても同じことをして暮らせるわけがないので、伝統と言いながら、実はその伝統そのものが常に変わっていることが前提でなければ、伝統は伝統にならないと思っている。そういう変化をこれから先も続けることができるかどうか、恐らく将来の姿を思い描くことができるかどうか、そしてこの西陣が生き残っていけるかどうかということも左右していくような気がする。

ある種、そうした変化を作り出し、それを受け入れ、さらにそれ自体を刷新していくような力を我々はもう一度見つめ直して、このビジョンの中で考えていく必要があるのではないかと考えている。そのヒントはすでに何人かの方から提示された。個々の事業者の新しいつながりや、あるいは今地域の中で発生している様々な困りごとの解決、クリエイティブな人材や地域の情報発信等、それは上手くできたり、できなかつたりしているところもあるが、そのこと自体が恐らく変化していこう、あるいは何か新しいものを付け加えていこうという力になるのではないかと考えている。

ただ、問題があるとすれば、そういう変化や新しいものをつくっていこうということをこの地域全体がしっかりと受け止め、それを互いに認め合い、賛成であれ、反対であれ、それを許容するような地域になれるかどうかということはあるかもしれない。これまでの京都、あるいは西陣はそれをやり続けることでここまで来たわけであり、衰退しているとすれば、それができなくなってきたから衰退しているのではないかとさえ思っている。

そういう意味で、変革の文化というようなものを今回のビジョンの中で具体的に形にできると良いと思っている。それは芸術文化であれ、生活文化であれ、あるいは産業であれ、日常生活の暮らしの仕組であれ、地域団体の組織化の仕方であれ、また従来あった様々な空間の設計や配置であれ、そういう構造そのものをどう変革していくのか、そしてどのように将来に向けて皆で認めながらつくっていけるのか、そういうところがこれからのビジョンづくりの中で一番大事ではないかと考えている。

私自身もまだ結論が出ているわけではないが、皆様と一緒に、イノベーションに満ちた創造力を十分に働かせられるようなまちにしていくことが、基本的な方向としてはあるのではないかと考えながら話を聞いていた次第である。

◆濱崎委員

資料を見て、上京区は本当に素晴らしい地域だと感じた。私は新町の上長者町通を東に入ったところにある数寄屋建築の「有斐斎弘道館」を運営している。「有斐斎弘道館」は江戸時代の

学問所で、学びの道を広めていくところとして、全国から門弟が 3,000 人も集っていた。それほど多くの人を集めていたことは、京都の中でも知らない方が多いと思う。

10 年ほど前、大きな数寄屋建築で 550 坪もの庭があった「有斐斎弘道館」を壊して、跡地にマンションを建設する計画が持ち上がり、すでにブルドーザーが入っているという状況だった。そこで、有志を集めて保存活動を始め、借金を返しながら活動している状況である。学問所を始めたのは皆川淇園(みながわきえん)という、経済学、論理学、博物学、美術等、学問で有名な方であり、一方で自身も画家として、名を知られていた人である。

私自身は伝統芸能・文化を研究し、専修大学で教鞭を執っているが、芸術文化が人間育成をしてきたところが、日本の伝統産業、文化、経済のすべてにとって大事だという信念があり、伝統芸能、伝統文化を通じた人材育成機関として現代の学問所の再興を目指している。

資料の中で、町家が減っているにも関わらず、それを認識している人が少ないというデータにショックを受けたが、この地域は今ならまだ間に合うので、まずは我々自身が認識して自覚していくことが必要だと思う。

もう 1 つ、伝統文化について、海外の方のニーズがあると示されているが、一方で伝統文化体験のニーズが少ないという課題もある。それは観光という側面から出てくるが、伝統文化については観光だけではなく、文化をつくる基礎であり、それは見せることではなくて、やってきたこと、やっていくこと自体に意味があるので、捉え方とつなぎ方をもう一度考え直すことが必要ではないかと思う。それは私が取り組んでいる、目に見える建物や景観と連動していて、空間は人間の感性を育てるので、ただ単に頭で考えると、データを見るだけではなく、感じる必要があるとすると、この地域だからこそできることがまだまだあると思う。先ほどから言われているように、人が財産であり、この地域には近所にすごい人材がいることも資料で書かれているが、「有斐斎弘道館」に全国から門弟が 3,000 人集ったのも、まさに皆川淇園という「人」に会いたいからこそである。それは歴史的にも証明されている。

したがって、私はまず形のある建物を守ったが、それを通して、形のないものをどのようにつないでいくかということに実験的に取り組み、成功させなければならないという使命を考えている。これは 1 つの建物に関することだが、実は上京区全体も日本全体も同じだと思っている。複雑な問題で、俄かに「こうすれば良い」という答えが出るものではないが、皆様の知恵を結集して、「何か変わったことをしなければならない」ということではなくて、ここの力が目に見える形で総合的な力として発揮できるような枠組づくりができれば良いと思っている。

◆平岡委員

私は同志社大学法学部の 3 回生だが、このような場に学生の私が参加できる機会を与えていただき、感謝申し上げます。よろしくお願ひしたい。

私は 5 歳の頃から桃菌学区で暮らしており、西陣中央小学校を卒業した。この話をすると「西陣中央小学校の卒業生がもう成人しているのか」と驚かれることも多々あるが、そのように西陣で暮らしてきた学生に何ができるのかということ、今考えている。

同志社大学法学部で学んでいる中で、他学部、他学年の学生が集まったプロジェクト科目「西陣のモノづくり産業の見える化と交流促進を通じた地域活性」を履修しており、西陣で活躍さ

れている様々なモノづくりの方々と交流している。そしてさらにその方々とのつながりを活かし、我々大学生が小学生を対象に交流するきっかけを生み出す等のイベントを企画してきた。

西陣の地域の良さの1つとして、西陣織だけでなく、革の鞆等、いろいろなモノづくりの方がおられる中で、革を打つ時に金槌の音が響いてもクレームが出にくい準工業地域という特徴もある。そのような西陣の魅力の一つひとつが関わって、今色々な産業の方々が西陣に集まっていることを感じているので、そのような方々同士の交流を基に新たなイベントや産業の発展等を考えられると授業で実感している。そのように授業で実感できたことをこの検討委員会の活動に活かし、かつ学生の多い地域でもあるので、我々のような学生が何をできるのか、地域の方々との交流をどのように生み出せるのか、学生ならではの視点で考えられたら良いと思っている。1年間、よろしくお願ひしたい。

◆福岡委員

我が社は伊豆蔵委員と同じように西陣の織屋で、私が入社したのはバブルがはじける少し前の平成元年だったが、その頃の西陣は活気があった。しかし、平成10年頃から業界の中で辞める人が増え、この地域から同業者が転出し、新しい人たちが入って来るようになった。私としては同級生がほとんど地域にいなくなって寂しいと感じている。

西陣織というと着物をイメージされると思うが、私は技術力と歴史だと思っており、最近、この西陣織の技術を活かして新しい素材で新しいものづくりをして世界に出している。そうしたなかで、必ず「西陣織のブランドを使いたい」と言われる。例えば、自動車業界やスポーツ業界等は日本の伝統文化をコンセプトにものづくりをされているので、その中で西陣織ブランドを使いたいという意向がある。我々は新しい人と新しい素材を開発して、このような技術力を次の世代に伝えていきたいと思っている。そのため、今、職人が高齢化し、若くても60代、70代になっているが、我々のところでは20代を中心に20～30代が職人として頑張っている。

やはり、西陣織の技術を次の世代に伝えようと思うと、ものづくりのできる若い人を育てなければならぬ。ただ、残念なことに、和装業界は価格が崩壊して職人を育てることが難しくなっており、我々は補助金を使って若い人たちを育てているが、この点については、例えば、昔の西陣小学校が空いているので、そういう場所を使って職人を育てる取組をしても良いのではないかと考えている。確かに、教える人が少ないという問題もあるのか、職人を育てることは簡単ではない。昔は染織試験場があって、そこで指導してもらうことができたが、今は五条のリサーチパークに移ってしまい、そこまで足を運んで教えてもらうのは難しくなっているので、どこか空いている場所を活用しながら、高齢化していく職人に協力していただいて、若い職人を育てる環境をつくっていききたいと思っている。

若い人の中には、意外と伝統産業に興味を持っている人が多く、特に地方の人が「やりたい」と言って西陣織工業組合を訪ねて来たり、京都市を訪ねて来たりすることもあるが、指導する人がいないなど、受け入れ態勢が整っていないので、何とかこの委員会をきっかけに、職人を育てることも考えていけたら良いと思っている。

◆福間委員

今回、私は商店連盟上京支部の支部長として出席しているが、京都全体の商店街組織の中に上京支部があり、その中の6つの商店街の1つである北野商店街の理事長を務めている。先ほど神原委員が話された京の七夕では、幟を立てる等、できる限りの広報活動をできればと頑張っている。

皆様の話を伺い、またプロフィールを拝見すると素晴らしいし、伝統や文化等の格好の良いお話もあると思うが、ただ、現実の声もあって良いのではないかという考えも含めて、1年間参加させていただければと思っている。

観光や伝統というテーマで話が進められると思うが、商店街の実態を紹介すると、基本的に商店街には2つのパターンがある。一つは、錦市場や四条、河原町のような、観光スポットの要素がある商店街である。それに対して、もう一つは、西陣は職住一致というテーマがあるように、北野や千本、大將軍等の商店街で、そこでは店も開いているし、そこに住んでもいる。我々のような商店街は本当に地域住民のつながりでやっている商店街であり、観光バスで行く商店街とは違う。その中で、今回参加させていただき、現状と共に商店街のあり方も話をしたいと思う。

商店街の衰退に関してはよく大型店舗の影響と言われるが、確かに影響はあるものの、商店街の存在意義とは何かということ商店街の人間自身が忘れていているという面もある。子育てに関する話があったが、北野商店街では「安心・安全」が本当の意味で大事だと考えている。例えば、大型店では店員に一声かけることもなく、レジでお金を払って終わりである。それに対して商店街では、通学路に立地しているところもあるので、子どもに「今日は寒いな」「昨日は顔を見なかったが、風邪をひいたのか」等の声掛けをする。地域に対する大事な役割を果たしているのが商店街である。また、魚の種類も知らない人に対して、商店街の魚屋は旬の魚や食べ方を教えてくれる。それによって、値段の問題だけではなく、他の価値を感じて商店街に足を運ぶようになる。そういうことが商店街の復活の道ではないかと考えている。

今回、「希薄」という言葉が出ていて、北野天満宮の氏子までそのような状況かと驚いたが、やはりコミュニティに帰結するものであり、地域の見直しが必要だと感じているので、この1年間は、私は私の立場で現状の話をしたいと思っている。

最後に整理したいポイントが2つある。1つは、「クリエイティブ」や「職人」についてである。「職人」が減る中で不躰かもしれないが、その仕事で食べていけるかが重要という面があると思う。先ほどの話では、小売店はそれなりの利潤があるけれども、サプライチェーンで考えるとそれほど儲けはない。私の知り合いもクリエイティブな職人で、仕事には魅力があるが、それだけでは食べられず、結局はアルバイトをしているので本末転倒である。それで職を守ることができるのか。ある意味、志があるのは良いけれども、それで一生やっていけるのかという問題がある。

もう1つ「町家」という言葉がよく出てくる。これはとても格好が良いが、その一方で「路地」という言葉も出てきた。私の本業は不動産業だが、町家については「古くて良い家があるので高く売れると思う」と言われて見に行くとただ古だけということがあった。したがって、「町家とは何か」について、行政が決めることも必要だが、有識者の方々が定義をきちんと決

めなければ保存はできないと思う。また、「路地」も防災的な問題がある。建築基準法があって、老朽化した建物を建替えようとしてもできないので、これも対策を考えなければならないと思う。

今回、商店街のことに加えて、クリエイティブ、職人、町家、路地等に関しても勉強させていただきたいと思っている。よろしくお願ひしたい。

◆吉田委員

私は立命館大学でマーケティングを専門に研究・教育している。元々は東北出身だが、「京都に住みたい」という理由で京都の大学に進むことにした。一度は外に出たが、トータルで10年以上こちらに住まわせていただく御縁をいただき、有難いと思っている。私がこの場に呼んでいただけた理由は、5年ほど前に紫野に住んでいた時、お茶の稽古に通い始め、それまで関心のなかった着物を着るようになってから、着物に関心を持ち、今はライフワークとして和装産業の研究をしているからだと思う。その分野の課題は、流通構造の問題、職人の後継者問題等、いろいろとあり、それ自体については経済産業省の方でもいろいろな取組を進めていると思う。したがって、私がこの会議に参加させていただくに当たっては、特に50年後を見据えてのビジョン策定というテーマに対して、3つの関心事を自己紹介と合わせてお話しさせていただく。

1つ目は着物産業に関わることで、私自身はポジティブに市場を見ている。もちろん過去と比べるとかなり厳しい状態だが、市場の状態に可能性を感じているのは、消費者が変わってきたからである。今までは効率的なものや安いものに流れていた人たちが、面倒でも自分にとって意味のあるものを重視するようになってきた結果、若い方の中に「着物を着たい」という人が増えてきている。そういう方はネットを介して個人的に情報収集できるので、着付けができない等のハードルもかなり下がっている。もちろん流通構造の問題があるために小売りの壁は大きいですが、そういう形で文化的なコンテンツの消費が上がっているという認識に基づいて、着物の消費が上がると考えると、文化的に価値の高いコンテンツを多く抱えている西陣地域は将来の可能性が高いと考える点が、1つ目に関心を持っているところである。

2つ目に、職住一致という地域の特徴が興味深い。特に多品種少量のものづくりを中心に構成されているところでは、「職人」と「クリエイティブ」は区別しなければならないと私自身は思っている。かつて西陣織の良かった時代をつくってきた背景を考えると、明治期以降に織屋や西陣織の組合等がある種のパトロンのような形でクリエイターの力を育ててきたことが大きいと思う。その時代には、例えば新しいデザインの開発として図案の募集を呼び掛けるなど、帯のデザインをしたことのない人の能力を着物産業に振り向けるような形でデザインを開発し、それに対応する形で職人の技能が上がっていったと聞いている。

着物に限らず、新しい能力のある人たちが入って来て、それまでのものづくりとの組合せで新しいものが展開していく可能性があるというのは、50年後を見据えた時に楽しみだと思う。その時に食べていけるかどうかという問題が現状ではあるが、それについてもポジティブに考えている。50年くらいのスパンで考えると、社会的な動向としては1つの仕事や1つの会社で終身雇用される形にならないような情勢があるので、ライフステージに合わせて副業を考えた

り、あるいは、自分にとって意味のある仕事と、食べるための仕事を複数組み合わせたり、そういう形になると、もう少し多様な人材がこの地域で活躍できるようになっていくのではないかと考えている。

3 つ目に、私は大学で仕事をしている立場でもあるので、大学と地域との関係性についても考えたいと思っている。今までの関係は、学生がただ地域に住まわせていただいているという形だったが、大学としても学生数が減り、かつ人工知能のような新しい技術のトレンドもある中で、大学の位置づけが大きく変わっていくと、地域との関わり方も変わっていくだろうと考えられる。これに対する答えはないが、皆様が言われたように、この地域は特に人を中心とした資源が豊富なので、委員会での議論を通じて可視化しながら、新しい大学とのパートナーシップのあり方を探りたいという思いで、勉強させていただきたい。1 年間よろしく願いしたい。

◆冷泉委員

私はこの地に生まれて、この地で育ち、上京区文化振興会の会長を務めている。そして、上京区は、西陣とほとんど一致すると思われることから、上京区の文化を考えることを通じて、本日の課題に関して考えてみたいと思う。

まず、この西陣は非常に高い技術力、文化力を持っており、その技術力の 1 つはもちろん西陣織である。他には、例えば、ここには「三千家」があり、その周りに千家十職という工芸の作家、それから能楽関係の方、お囃子の方たちもたくさん住まれている。また、狂言の方もいる。そのように古典芸能に関する大変な文化力があり、人間国宝のような方々が数多くいるところである。

一方、寺之内通の周辺は、日蓮宗の妙覚寺や妙顕寺など大寺院が軒を連ねている。かつて京都の町衆は皆、日蓮宗だったが、これらの日蓮宗の寺は地方にあつたら驚くほどの大きさである。神社は、北野天満宮はもちろん、上御霊神社もある。禅宗の相国寺のような大きな寺もある。

ところが、それらの文化力は残念なことにバラバラなので、今、これをつなぐ力が必要とされていると思う。特に西陣織については、我々が子どもの頃は各家々から機音が聞こえてくるという状況であり、今はいくら頑張ってもあの時代には戻らないが、ここにある技術力は世界に誇れるものである。例えば、海外ブランドと組んで鞆やクッション、インテリア素材を作られている会社もあれば、世界に向けて茶碗を展示しているところもある。そういう世界的に値打ちのある技術力がある土地だということを、もう一度認識する必要があり、それをつなげる必要がある、あるいは、それを発信していく力を持つ必要があると思う。その場所として寺や神社も重要だと思う。

また、残念ながら、若い人が少なくなっているが、これは日本全体の問題なので仕方がない。私がこの中で一番衰退していると思うのは千本通であり、何とかしたい。そこで、若い人に頼るのではなく、60 代、70 代の方々が溢れるようなまちにしてはどうかと思う。彼らは結構パワーがある。高齢者というと福祉施設で民謡や遊戯をしているイメージがあるが、実は我々が同窓会等をすると皆グループサウンズの歌を歌い、ダンスをする。そういう世代を放っておく

手はないのではないか。その人たちもまちの賑わいに大手を振って出て来てくれるような仕掛けが必要だと思う。

他にも、この地域には料亭も多いが、あまり認識されていなかったり、田の字地区の中京区辺りの町家が重要視されがちであるが、そうではなくて、こちらの方が規模は小さいけれども数多くあるなどということも、ここで考えていきたいと思う。

◆高田委員長

皆様から期待以上のコメントをたくさんいただき、最初はどうかと思っていたテーマも、このメンバーで議論をすると何か出てくるのではないかと期待が持てた。また、初回から良い御提案も含めて意見を出していただけたように思う。

全体としてポジティブシンキングで進めていくことが必要だと思うが、委員の皆様にはそういうスタンスの方がお集まりいただいていることも確認できた。ネガティブに見えることをポジティブに組み替えていくことが、長く続いてきた京都の文化の基本構造だと思う。先ほど新川委員が言われたように、変革の歴史を知り、時間的なパースペクティブを持つことが大事である。それを西陣をフィールドにして考えることになると思う。

予定の時間が残り少なくなり、今いただいた御意見を整理する時間もないようなので、本日もいただいた御意見を議事録にして、次回以降に相互の関係等を考えながら議論してはどうかと思う。それから、議論の仕方も重要だと思う。今いただいた御意見をいくつかの論点にまとめて議論していただきたいと思う。

それらも含めて、今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いしたい。

(4) 今後のスケジュール

【資料説明】— 省略 —

◆高田委員長

議論の進め方について重要なことは、先ほど御提示いただいたような課題を相互に関連づけることである。先ほどから連携の重要性が指摘されているが、ここでもそれぞれの専門分野や御提案の相互の関係をよく考えて、つながりを深めていきたいと思う。

それとともに、この委員会に出席されている方々以外の方からも既にアンケート等を取っていただいているが、それに加えて、様々な団体や住民の方々の御意見を集めていただき、そういうものも加えてビジョンを作っていくような進め方をしてはどうかと思う。異論はないか。

(異議なし)

最初に述べたように、50年後に向けて1つの目標を決めて進めていくというよりも、いろいろな可能性を考えることが大事だと思うので、あまり集約しようと考えずに、できる限り可能性を広げて考えるという方向で議論をいただけたらと思う。よろしくをお願いしたい。

それでは、本日は皆様から一通りの御意見をお伺いしたということで、委員会を閉じさせていただきます。

それから、委員の皆様には本日言い足りなかった部分もおありかと思うので、それについて

は事務局の方にメモでも結構なのでコメント等を出していただけると、次回の委員会までに整理をしていただけるということである。よろしく願いたい。

それでは、進行を事務局にお返りする。

◆平井部長

本日は貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。時間が足りないために、議論し、さらに踏み込んだ意見を出していただくことができず、残念に思う。委員の皆様には、本日伺った御意見を基に事務局としてももう少し伺いたいところもあるので、個別に御意見を伺わせていただきたい。委員の皆様も他の委員の御意見に対する御質問、御意見もおありかと思うので、それらも含めて、我々と連絡を取り合いながら、次回に向けて作業をさせていただければと思っている。

第2回の検討委員会は、2月下旬～3月頃に開催したいと考えている。最終的な日程については委員長とも相談させていただき、改めて皆様に案内させていただく。

◆高田委員長

それでは、これで本日の委員会を終了する。

以 上